

アイヌの伝承にみる北海道の土砂災害

○国土交通省北海道局 巖倉 啓子
北海道大学大学院農学研究院 野呂 智之
北海道大学大学院農学研究院 南 哲行

1 はじめに

土砂災害対策を検討する上で過去の災害履歴は最も基本的かつ重要な情報であり、一般的には都道府県や市町村の災害史、国の気象災害報告等の資料が用いられる。特に大規模な災害を対象にした場合には発生頻度が低いこともあり明治以前の記録も重要である。このことは、平成25年10月に伊豆大島で発生した土砂災害と類似する災害が1590年代の文禄年間にも記録されていること等からも示唆される。

しかしながら北海道についてはその歴史的背景から明治以前の災害記録が乏しい。そのため本報告では、北海道における長期的な土砂災害履歴の解明に資するべく、文献資料におけるアイヌの伝承から土砂災害の発生と関係が深いと推測されるものを抽出し、その一部について伝説に関する部分を中心として概要を記述し、考察を加えたものである。

2 調査概要

アイヌの人々は日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住し、独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族であり、文字はもたないがユーカラに代表される豊富な神話伝説を有し、また地名としてもその土地の自然的特徴や生活との関わりに由来する呼称が多く残されている。本調査では既存のアイヌ伝承の記録・研究に関する文献のうち、金田一京助氏、久保寺逸彦氏、更科源蔵氏らの著書や、北海道庁によるアイヌ民俗文化財調査報告等の既存文献を主な調査対象とした。

3 土砂災害との関係が推測されるアイヌの伝承

3.1 山津波に関する伝承

金田一らはアイヌ語のオキムンペ(「山からくるもの」の意)を山津波と訳しており、伝承の文脈から大小の規模を含む土石流であることが推察される。山津波に関する伝承は日高地方の記録に多く抽出され、これは近代のアイヌ文化研究の多くが日高地方をフィールドとして行われていたことが関係していると考えられるものの、本地域は日高山脈を擁し、土木研究所による深層崩壊の発生頻度も「特に高い」とされている地域であることは留意すべきである。以下にそれらの例を示す。

3.1.1 沙流川の山津波－アイヌラックルの自叙

(概要) 沙流川の上流の大沼に棲む大アメマスが飢餓を起こして人間を苦しめていたため、アイヌラックル(文化神)が、大格闘の末に大アメマスを退治したが、意図せずに大沼を決壊させてしまい、激し

い山津波が起こって川下に流れ下った。そのため養姉から「せっかく人間の村を飢饉から救っておきながら、どうして村を壊すようなことをするのか」と窘められた。

(考察) 本伝承は日高地方に伝わる代表的なオイナ(古伝)の一つであり、多くの類話が伝えられている。過去に沙流川で大規模な山津波が発生し、集落に被害が生じたことを示唆していると考えられる。

3.1.2 津波と山津波－兎の自叙

(概要) 兎がある人間の酋長の村に行つて「恐ろしい津波と激しい山津波が一緒に来襲しようとしている、高い所に逃げろ」と告げたが、その酋長は村人に命令し兎を追い払わせた。兎は次にオキクルミ(英雄神)の村に行つて同様に告げると、オキクルミは兎に恭しく礼拝し感謝の言葉を述べた。しばらく後、村々を津波と山津波が同時に襲い、避難していたオキクルミとその村人のみが助かった。

(考察) 日高地方に伝わる伝承である。日高地方は地震活動の活発な地域であるとともに地質堆積物から過去に幾度も大規模な津波の来襲があったことが推測されており、過去に津波と山津波がほぼ同時に発生した可能性はあると考えられる。本伝承は複合的な災害形態、また動物の異常行動に注意を払うことを防災知識として後世に伝えるものと想定される。

なお、この伝承における津波はアイヌ語のオレブンペ(「沖からくるもの」の意)の訳であり、沿岸部を中心にオレブンペに関する伝承も数多くみられる。

一方、内陸部でオレブンペが発生・到達したという伝承もあること、「山津波はオレブンペと言う」と述べた伝承者の記録もあるため、特に内陸部のオレブンペについては山津波を意味する可能性もあることを考慮する必要がある。

3.1.3 静内川の山津波

(概要) 日高地方静内川沿いの部落の人が、夢の中で川の上流の神々から「静内川の水源に棲みついてしまった河童の神を追い出すので、2、3日は誰も川に近づかない様にする」と告げられた。しばらく後、雨も降らず風も荒れないのに激しい山津波が起こり、ものすごい土砂崩れが押し下ってきた。お告げを信じず川に近づいた人は流されて亡くなった。

(考察) 静内川の上流域も深層崩壊の発生頻度が高い地域に含まれており、過去の山津波発生履歴を伝える伝承であると考えられる。さらに、山津波は好天時に突然発生する可能性があることを教訓として伝

えていると考えられる。

3.1.4 融雪期の氷の山津波

(概要) ユーベツ村(胆振地方鶴川の支流にある地名)に住む夫婦の夫は、同居する妻の母親から「泥が詰まった雪の玉が落ちてきたら山津波が来る」と教えられていた。早春に川の上流から流れてきた雪玉を割ると中に泥が詰まっていた。夫婦が老婆に命じられ高台に避難すると、暴風雨があり深夜に氷がぶつかって流れる音がした。夜が明けたら川は全部氷で埋まり、村も全て氷の下敷きとなっていた。

(考察) 地すべり或いはアイスジャム等何らかの現象により発生した河道閉塞が、早春の降雨により決壊し集落に被害が発生したことを伝える伝承と考えられる。

3.2 河道閉塞

何らかの要因による河道閉塞の発生、さらにその決壊による洪水・土石流の発生が推測される伝承の例を以下に示す。

3.2.1 神居古潭(石狩川)

(概要) 昔、神居古潭に棲む凶悪な鬼神が石狩川に大岩を投げ落として河道を堰きとめたため、上流のアイヌが溺死しそうになった。これを見ていた大雪山の神が一部の岩石を破壊し、危うくアイヌ達は助かった。怒った鬼神は大雪山の神に掴みかかったが、そこに現れたシャマイクル(英雄神)が鬼神と大格闘の末、首を切り落とした。鬼神の首や胴体等が岩に変化し今も神居古潭に残っている。

(考察) 上川地方に伝わる、石狩川中流部の狭窄部である神居古潭の河道閉塞を想起させる伝承である。神居古潭変成岩類には地すべりを起こしやすい蛇紋岩も含まれており、過去に河道閉塞の発生に結びつく現象が発生した可能性はあると考えられる。

3.2.2 西別川

(概要) 根室地方の西別川がある朝突然干上がっており、村人達は地震の前触れか山津波かと騒いだ。川上に行ってみると、狭窄部に大木の様な怪魚が横たわり川を堰きとめ、上流には沼が広がっていた。下流の村落から村落へと急使が飛び、川辺のアイヌが山の上に逃げる頃、水は恐ろしい唸りをあげて峰を砕き樹木を押し倒して流れ下った。

(考察) 道東地域に伝わる伝承。河道閉塞及び決壊による災害の発生と関係していることが推測される。

3.2.3 千歳川

(概要) ①昔、大津波によって今の千歳神社の近くの山がもぎ取られ、馬追山にぶつかってから石狩川に沿って北の方に流れていき海へでていった。②昔、支笏湖の水があふれて洪水になり、千歳にあった山が押し流された。

(考察) ①、②は何れも石狩川水系千歳川に関する伝説である。支笏湖を含む千歳川上流部では過去、

樽前山の噴火に起因する土砂や流木の供給があったと考えられること、ネッソウ(寄木の滝)、トイソウ(土の滝)といった河道閉塞を想起させる地名があること等から、大規模で広域的に影響を及ぼす災害現象が発生した可能性はあると考えられる。

3.3 地すべり

各地には地すべりの発生との関係が推測される伝承も複数見られ、以下にその一例を示す。

3.3.1 鶴川の地すべり

(概要) 昔、アイヌ部落の代表者を一人ずつ勇払に集め殺す謀略があった。それを知らずに鶴川の上流部の人たちが丸木舟に乗って下ってきたが、急にルベシベのところの山の岬が川にせり出してきて船を通さなかったので命が助かったと言われ、この岬に今も感謝の祈りと酒を捧げている。

(考察) 鶴川中流に位置するむかわ町穂別地域に伝わる伝承であり、河道に押し出してきた地すべりを表現したものと考えられる。

3.4 火山噴火

有珠山、十勝岳、駒ヶ岳等の火山噴火に関連した伝承も数多く残されており、その一例を示す。

3.4.1 駒ヶ岳

(概要) 室蘭の岬の部落に住んでいた兄弟が噴火湾の対岸に移ろうと船を漕いでいると、突然駒ヶ岳が爆発し噴出した軽石が海上に浮かんで船を動かすことができなくなった。

(考察) 過去の駒ヶ岳噴火時に、船が動かせなくなるほどの大量の軽石が海上に浮遊したことを示す伝承であることが推測される。

4 おわりに

アイヌ伝承より、明治以前の北海道においても大規模な土砂災害が発生していたことが推測される。今後はこれらの伝承を手掛かりとして地形や地質等の自然科学的な調査や災害に関連したアイヌ地名の研究・集落の形成などの人文科学的な調査を進めることは、北海道の土砂災害履歴の解明に有効であると考えられる。最後に、本研究を進めるにあたり北海道大学アイヌ・先住民研究センターの常本センター長並びに研究者の方々、公益財団法人アイヌ文化・研究推進機構の高橋規氏には貴重な助言を頂き、また(一財)砂防・地すべり技術センターに支援を受けましたことに感謝申し上げます。

主な参考文献

- 1)立木猛治著「伊豆大島志考」伊豆大島志考刊行会発行
- 2)久保寺逸彦編著「アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究」(株)岩波書店
- 3)北海道教育庁生涯学習部文化課編「アイヌ民族文化財調査報告書」北海道教育委員会
- 4)更科源蔵「アイヌ著作集 I アイヌ伝説集」(株)みやま書房
- 5)近江正一「アイヌ語から生まれた郷土の地名と伝説」上川地区学校生活協同組合